

継続的就労女性と働く意味  
—織物産地の経験をもとに—

木本喜美子（一橋大学名誉教授）

### 1. 課題意識

本報告は、福井県勝山市において、高度成長期に織物業に従事してきた既婚女性のライフヒストリーに関する調査データの一部を用いている。報告者を研究代表者とする共同研究チームは、女性労働史の研究課題を、「女性はどこでどのように働いてきたのか」を実証的に描くことにありと捉え、特定の地域労働市場に着眼し、女性労働者の実像に迫るための事例研究を重ねてきた。地域産業にまでおいて女性と職場、そして家族との関連構造の剔出を、中核的な課題としてきた。調査対象として設定したのは、戦後の女性労働者像の源流をなす製造職の既婚女性労働者層であり、労働史研究において、戦前期には多くの研究蓄積を有するにもかかわらず戦後期のそれが乏しい繊維産業のうち、織物業に着目した。

とりわけ戦前期からの織物産地である当該地域を取り上げる意義は、全国的に見れば働かない主婦が増大したとされる高度成長期にも、織物産業にとって欠かすことができない働き手として多くの既婚女性が継続的に就労してきたという事実にある。大都市圏においての、わけても大企業労働者の妻たちにおける「主婦化」の進展が見られたのと同じ時代に、これとはほど遠い既婚女性の存在形態があり、そこでは地域における共稼ぎ労働文化の浸透がみとめられることは重要である。こうした地域事例をていねいに掘り起こして、既婚女性の継続的就労を支える家族的基盤および地域的基盤を明らかにしていくことはひいては、同時代における「主婦化」トレンドと共稼ぎ労働文化とがいかにかせめぎ合っていたのかを解き明かすという課題を深めることになるからである。

### 2. 方法的視角

そのさい考察の中心に置きたいのは、既婚女性自身による働くことに対する意味づけである。そのために労働—生活史分析を用いて、彼女たちの家族内地位とそれを取りまく家族内諸関係を重視し、同時に家族的諸要因が職場での働き方にどのような影響をもたらすのかについても目配りしながら、職場と家族を行き来してきた既婚女性が、自己の働く意味をどのように見いだしていたのかを考察する。それを捉えるための労働—生活史上の分析軸を、次の二つに絞りたい。その第一は、結婚後の雇用労働への就労を誰が決めたのか、である。彼女たち自身による自己決定なのか、それとも家族の意向によるものなのか。第二には、彼女たちが稼得した賃金がどのように使われたのかという点である。その使途に対する決定権や発言権を、彼女たち自身が有していたのかどうか。こうした二つの分析軸から継続的に就労してきた既婚女性が、みずから働いて賃金を得ること自体を、いかに受けとめ、意味づけていたのかを捉え出したい。

なお織物業に従事してきた既婚女性労働者とは異なる比較群として、当該地域における女性教員層の事例を取り上げる。言うまでもなく両者は、出身階層、学歴、職業内容において大きな差異がある。だが女性教員層は同一地域内において織物業に就労する女性労働者と、その子どもたちの学校教育を介して接していた。しかも両者はともに、地域内で働き続けてきた女性という共通性がある。そうした点を意識して、本報告では、前者を中心的考察対象としつつも、同時代を生きた女性教員層についても同様な分析枠組みを用いて、働く意味づけを照射し、両者の共通性と差異について考察を加えたい。ただしこの女性教員層については調査に着手して日が浅いために調査事例数が限られており、課題探索的な比較分析の段階にとどまることをあらかじめお断りしておきたい。

（キーワード：女性労働と家族、労働—生活史、ジェンダー）

<sup>i</sup> 調査は主として、科研費基盤研究(B)「〈女性労働と家族〉の史的再構成に関する実証的研究」(2010～2013年度)による。この他、福島県の織物産地(伊達郡川俣町)の調査研究も手がけてきた。調査研究の課題と方法をめぐっては、木本喜美子「女性たちはどこでどのように働いてきたのか」(中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学—労働中心主義の向こうへ』世界思想社、2016年)、および同「女性労働史研究の課題を再考する」『大分大学経済論集』第70巻第5・6号、2019年)を参照されたい。